

み教えの言葉を学ぶ

おう じょう じょう ど

往生浄土

浄土は嘘、偽り照らし映す法の鏡

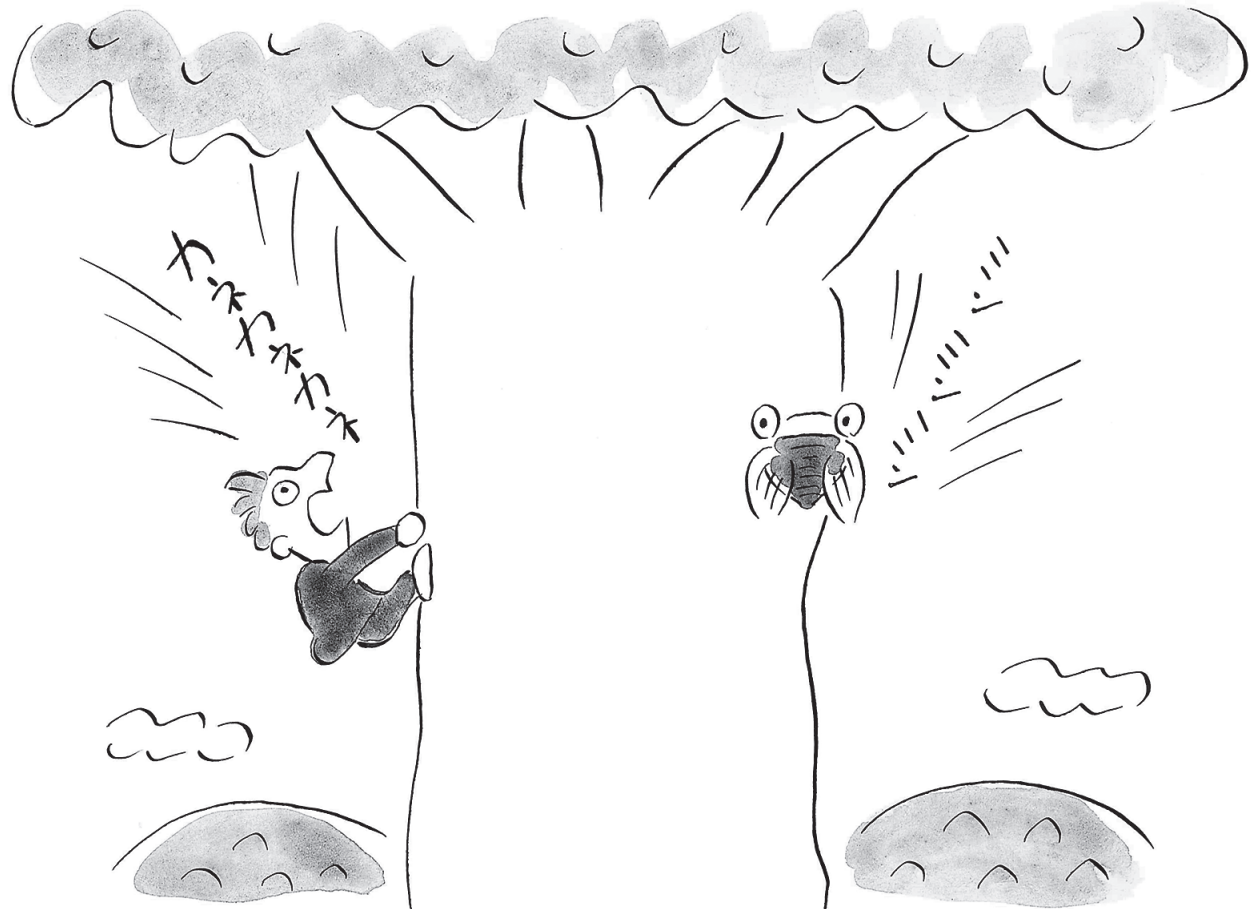
浄土真宗のみ教えを伝えるためのキーワード、「往生浄土」「悪人正機」「現生正定聚」「還相回向」について本願寺派総合研究所の満井秀城副所長に解説していただきます。今号は「往生浄土」です。

見えない浄土はお伽話？「はたらき」で存在を知る

近年、「浄土」がすんなり受け入れられていないように感じます。「誰も見てきた者はいない」とか、「科学が発達した現代ではお伽話」といった風潮に思っています。

「誰も見てきた者はいない」とは、言い換えれば「自分の目で確認できないものは信じない」ということでしょうか。しかしながら、「自分の目に見えない」として、「存在しない」として、同義ではありません。目に見えなくても存在するものはいくらでもあります。

このことは、昔からよく「風」に譬えられます。「風」自体は目では見えませんが、窓の外に木々の枝や葉が揺れるのを見ることが、「風が吹いている」とわかるのです。つまり、直接目に見えなくても、木々が揺れるという「はたらき」でその存在が知られます。



え/ひじ みえ

み教えの言葉を学ぶ④

筆者 満井 秀城



1958年生まれ。本願寺派総合研究所副所長。司教。

悪口を言うのが楽しく、愚痴ばかりこぼしている私の口から、なぜかお伽話が出てきます。これは、私の不実な思いからありえない話で、本願力の「はたらき」以外にありません。

「浄土」もまた、この本願力が仕上がったもの（願力成就の報土）。「註釈版聖典」(98頁)です。だから「浄土」を表現したお伽話に向かい、お寺の本堂に入ると、なぜか心が安らぐのです。私たちの目は、しよせん大したものではないかもしれません。壁ひとつ隔てただけで、向こうは何も見えません。また、他人の悪いところはよく見えるのに、自分の悪いところは見えません。鏡を使っても、表面上の飾り立てた姿だけで、心の中の汚さには気が付きません。

曇鸞大師の『往生論註』に、中国の故事を引いて、「蟬は春秋を識らず」「註釈版聖典七祖篇」(98頁)とあります。「蟬」はセミのこと。セミは幼虫の間長く地中で過ごし、ある年の夏に地上に出て約一週間「ミンミンミン」と鳴いて死んでいきます。セミにとって地上は夏しかなく、春夏秋冬の季節の移り変わりを知りません。それが「春秋を識らず」です。

春や秋や冬を知らないセミは、それらが「無い」と思っているでしょう。しかし私たち人間は、春も秋も冬も「有る」ことを知っています。これと同じように人間も50年か100年のわずかな知識で「浄土」がわからないだけで「無い」と思っているなら、セミと同じです。

『論註』(101頁)に「この虫めに朱陽の節を知らんや」と続きます。「朱陽の節」とは「夏」のこと。「夏は知ってゐる」と思っても知れませんが、「夏の夏たる所以」を知らないのです。私たちがこの人間界のことをわかっていて、「何のために人間に生まれてきたか」がわからずに、ただ「カネカネカネ」と鳴いて一生を送るなら、泣くに泣けない寂しい人生です。

私たちが人間の知識でわからないことは、誰に聞けばよいのでしょうか。さくられた方に聞くばかりではありません。それが、お釈迦さまの言葉、経典に従うことです。

「真如法性」のさとりの世界 凡夫に認識、表現できない

経典では、浄土は美しい花が咲き、寶石が散らばる世界。など説かれますが、これを「お伽話」と片付けてしまっています。しかし、お釈迦さまはこうして私たちにいろいろな説き方をなさったのかを考えたほうがよいかもしれません。さくられた方の真実のお言葉を、凡夫の迷いの論理で切り捨てるとしたら本末転倒です。

「真如法性」というさとりの世界について、親鸞聖人は『唯信鈔文意』で「色もなく、形もない。だから、心にも思うことができないし、言葉にも表すことができない」と言われています。さきほどの世界は、凡夫の側からは認識や表現ができないということですが、私たちがさきういう世界に行きたいと思うでしょうか。「はあ、そういうものですか」と、せいぜい感心して終わらなと思っています。自分が迷っていることに気が付かず、迷いの輪から抜けださずを求めようとしてない私たちが、どう説いたらさとりを求めてくれるだろうかとお釈迦さまのご恩恵の結果として、阿彌陀さまの「浄土」を「素晴らしい世界ですよ」と具体的に説き示してくださいました。海外旅行を勧める旅行代理店は、「ここなら行きたい」と思わせるような写真いっぱいパンフレットを作ってくれます。実際の景色を示され、「行きたい」という思いが湧くのです。

一方、お釈迦さまのご説法が旅行代理店のパンフレットと違うのは、浄土の景色は教えの内容を表現していません。例えは『阿彌陀経』に説かれる浄土の一場面には、七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹あり。みなこれ四宝。

と説かれています。「七重」の「七」とは、数を限定する数ではなく、「六道」という迷いの超えた満ち満ちた世界。「欄楯」とは「生け垣」という目録の高さ、「羅網」とは遙か上空の虚空の網、「行樹」とは背の高い並木のごとで目録の高さと遙か上空との中間になり、これらによって目にするものがみな宝でできていることを表現しています。浄土は、見るもの聞くもの全てを宝として受け止めることのできる世界ということになります。

私たちが、全てを宝として受け止めることができず、好きか嫌いか役に立つか立たないか、自分の都合で価値判断します。そして、ものの本当の価値を見抜く力がないうちに数字に頼るのです。値段が高いか安いかわ、そんな見方しかできないのが私たちです。私たちがこのように嘘、偽りのあり方を照らし映す法の鏡が「浄土」です。(次回は悪人正機)

京の名物 京乃六條おやきもち 江戸時代からお坊さん・ご門徒さんの集い会でたべられたであろう京の名物「六條おやきもち」 本願寺にお参りのお帰りにどうぞ 報恩講にも大変好評です。 名産 小豆入り...1個 110円 名代 柚子入り...1個 130円 発売元 京都市下京区堀川六条下ル(西本願寺前) 京乃六條おやきもち茶寮 TEL 0120-075-024 FAX 0120-051-881

浜屋は関西最大級の ご寺院様お仏具・お仏壇の専門店です。 京都府京都市 本願寺 大谷本願様 第一講経所修復のご下命をいただきました。 2019年 4月28日(日) 5月6日(月) 「寺院仏具展」 神戸サンポールホール全館 関西最大級の安心の37店舗ネットワーク 浜屋 0120-1616-94

親鸞聖人の教え 親鸞聖人の求道体験とその生涯から浄土真宗の教えを解説し、体系的に入門書。 最新刊 親鸞聖人の教え 浄土三部経と七祖の教え 勧学寮編纂 親鸞の教えとその展開 中国・日本篇